

二〇一七年 安居本講

『蓮如上人御一代記聞書』試論

大桑 齊

開講の辞

二〇一七年度安居の本講講者を拝命し、浅学菲才の身に、責務の重さを痛感している。

戦国期から江戸時代の思想史を専門としながら、蓮如上人研究などを介して真宗思想への関わりを細々と続けてきた歴史研究者にとつて、まったく思いもかけないことであり、何を講ずべきなのかも思い浮かばなかった。安居という聖教考究の場ということから、『蓮如上人御一代記聞書』を選ぶしかない。読んでみよ、との上人の声に促されて、急遽、改めて、通読を試みた。何とか明らかにし得たことがらを、『御一代記聞書』（以下、このように略称）考究への試論として提示したい。

『御一代記聞書』とはいかなる聖教なのか。「一人なりとも、人の、信を取るが、一宗の繁昌に候う」（第二二三条）など、有名な言葉が収められた周知の聖教であるが、この書が全体として何を説こうとしているのかと問えば、応答しうる人は少ない。三〇点近くの講演録や講義録が管見に入ったが、それらのほとんどが、任意に選びだした条項に解説を加えるという方式である。全体像を論じたのは、昭和二十四年度（一九四九）安居における大須賀秀道師が唯一であるが、それとても十分に意を尽く

しているとはいいたい。考究されることの少なかった聖教といわねばならない。

『御一代記聞書』は、蓮如上人の第十男、願得寺実悟が収録した『実悟旧記』と呼ばれる蓮如上人の法語集を元にして、やはり蓮如上人法語集である『空善聞書』・『昔物語記』の一部とを加えて一書に編集された。天正十三年（一五八五）書写という奥書を持つ。その元本は所在不明で、恵空講師の手になる『蓮如上人御物語』と題される写本が知られるのみである。明和二年（一七六五）に西派の『真宗法要』に、文化八年（一八一二）に当派の『真宗仮名聖教』に収録刊行され、世に知られることになった。成立以来百八十年ないし二百二十六年を経てのことと、戦国最末期に成立しながら、近世中後期に至って世に出た聖教である。蓮如上人の言葉を収録するといえ、編纂という解釈を伴い、聖教として世に出てからは、拝読されることで新たな解釈が加えられ、意味が再発見される。舞台となったのが江戸中末期および明治大正期であり、その思想史が背景となっている。『御一代記聞書』は思想史において捉えられねばならない。

この聖教は蓮如上人の言葉の「聞書」である。音声言語が書記言語に編纂された書である。信心を〈語る蓮如上人〉、その言葉が、我かく聞けりとして記録編纂されて、〈語る蓮如上人〉は〈語られた蓮如上人〉となる。そのとき、音声言語と書記言語はまったく別の世界に属していることを知らねばならない。感性と知性という差異であり、書記言語世界では、音声言語世界に存在しない自己という

主体が存在し解釈を加えていく。書記言語は目で読むという主体の能動的営為によって解釈する世界を構成する。これが拝読である。これに対して音声言語世界では、耳で聞くという受動的営為によって、解釈ではなく拝受する世界が構成される。聴聞である。しかし音声言語が書記言語化された「聞書」は、拝読によって、黙読であつたにしても、〈語る蓮如上人〉の音声の世界に、感性の世界に、引き込まれて聴聞となる。音読されれば、聴聞者をもその世界に引き込む。かくして「聞書」という様式の書は、音声言語と書記言語の両世界、感性と知性、聴聞と拝読、拝受と解釈を架橋し統合する。蓮如上人自ら文章化された御文がある。平易な言葉を用いることで音声言語に近いが、書記言語であることは動かない。「信心獲得す」というのは、第十八の願をこころうるなり。この願をこころうるというのは「（御文五―五）」というように、信心の論理が語られる。知性の世界であり、解釈が伴ってくる。対して『御一代記聞書』では、「聖人の御流は、たのむ一念の所、肝要なり」（第一八八条）と、信心の論理ではなく信心のありようが語られる。御文と同じ書記言語でありながら、「聞書」であり〈語る蓮如上人〉として、感性の世界が広がり、解釈よりも聴聞することが求められる。

〈語られた蓮如上人〉としては『蓮如上人遺徳記』がある。伝記であり書記言語であるが、蓮如上人絵伝の絵解きとして読み上げられれば、〈語る蓮如上人〉として躍動する。『御文』『御一代記聞書』『遺徳記』の三書によって蓮如上人の世界が形成されている。それは知性の世界を感性によって打破

し包括する信心の世界である。そのことを念頭に置いて、〈語る蓮如上人〉が〈語られた蓮如上人〉として書記化された書として『御一代記聞書』が読まれねばならない。

「真宗論語」とも称されて、信後の道徳的实践を説く書として本書が語られることが多かった。しかしながら、本書の要は信心の勧めであって、合わせて信心者の「たしなみ」が説かれるが、「仏法をあるじとし、世間を客人とせよ」(第一五七条)と、主人たる信心の下に世間は客人として相対化され、道徳的实践は主ではありえない。「真宗論語」とは、師蓮如上人と弟子たちの対話としての構成が、孔子と弟子の対話である『論語』に類似していることによっている。

本書も御文と同じく「たのむ」が多く説かれるが、如来回向の信心として説かれることに特徴がある。如来の方から、仏智のはたらきとして、信心が贈与され、機法一体の南無阿弥陀仏となり、自信教人信としてはたらくことで、一宗の繁昌となるという。信心はもとより、人間そのものが如来から贈与された存在として「我なし」であり、万物も如来から贈与された「仏物」として、仏の「御用」としてはたらく。贈与された如来の真実の言葉が御文であり、権者にしてご開山再誕の蓮如上人が仰せられた金言である。如来贈与の真実として万人に開かれた言葉であるが、文字言語として記録されることで、固定化され所有化される。しかしあくまで、如来贈与であることにおいて所有化は破られる。本尊も聖教も、固定化所有化を超え、非所有として「掛けやぶれ」、「よみやぶれ」(第六九条)と

勧められる。固定化所有化という人間の欲望を破る如来贈与の真実信心が語られる。

『御一代記聞書』は音声言語の感性の世界に踏み込み、「弥陀の方から」の救済という蓮如上人の音声が響き渡る。書記言語世界にあつて救済に向き合う知性は、受け取れという音声によって打破される。「我なし」という蓮如上人の音声が、計らいを旨とする書記言語世界を打ち破る。書記言語は、音声言語を抱え込むことで知性で感性を捉えたかに見えるが、逆にそのことによって内から崩壊する。知性の崩壊による感性としての信心である。

本書が登場した江戸中後期は、真宗世界には三業帰命説が吹き荒れていた。その対抗言説として回向論を掲げて本書が登場した。門徒の人々や妙好人の信心が本書の信心と軌を一にする。さらには明治期、近代化文明化という自力世界の展開のなかで、清沢満之師や暁烏敏師ら浩浩洞の人々は本書の信心を根底においていたと考えられる。絶対無限妙用乗托落在の信心とは、本書を基底とする信心である。絶対無限との同一をいうこの信心が、超国家主義の基盤となったという指摘がなされている。この聖教を読解するとはいかなる営為なのか、いかに読むかが、いま、の課題である。

宗祖の信心と近代・現代の信心の間に位置される蓮如上人。近現代教学は宗祖の言葉によって表現されることが多いが、その根底には蓮如上人の信心が横たわっているという思いがある。あるいは蓮如上人の信心の門徒衆と近代的宗祖的教団上層の教学は、対立的であるようでありながら、実は重層

的構造にあるのではないのか。いま、改めて『御一代記聞書』を読む意味は、これを解明することにあると考えている。

二〇一七年七月十七日

大 桑 齊

目 次

開講の辞

総説 『蓮如上人御一代記聞書』とは…………… 1

(1) いかに読むか…………… 1

(2) 思想史としての位置——親鸞聖人から清沢師・才市へ…………… 6

(3) 江戸真宗世界の信心…………… 11

序説1 『蓮如上人御一代記聞書』の出現…………… 18

(1) 『真宗法要』・『真宗仮名聖教』への収録…………… 18

(2) 『御遺言記蓮如上人御一代聞書』…………… 24

(3) 聖教本底本と対校本…………… 28

(4)	元禄三年恵空書写本『蓮如上人御物語聞書』	31
(5)	別本『蓮如上人御物語(聞書)』	37
(6)	『空善聞書』と『山科連署記』	42
(7)	『昔物語記』	44
(8)	『実悟旧記』Ⅱ『蓮如上人一語記』	49
序説2	受容と研究——いかに読まれたか——	53
(1)	刊行年表	53
(2)	香月院深励師『蓮如上人御一代記聞書講義』	58
(3)	本文刊行	59
(4)	精神主義との関わり	60
(5)	課題的読みの展開	63
(6)	聖教と解釈	68

本論Ⅰ	弥陀回向の信心(第一部『空善聞書』)	73
(1)	年代記的配列と法語の配置	73
(2)	第一段——弥陀回向の他力信心と機法一体	76
(3)	第二段——開山再誕一流再興と自信教人信	83
(4)	第三段——開山聖人の継承	86
(5)	第四段——弥陀回向の信後相続念仏と罪沙汰無用論	89
本論Ⅱ	信心者の〈たしなみ〉(第二部『昔物語記』)	93
(1)	『昔物語記』序文——言葉の真実化正統化	93
(2)	「たしなみ」と御掟——道宗の言葉	95
(3)	師弟応答による〈たしなみ〉の展開	100
(4)	〈たしなみ〉としての心の持ちよう	104
本論Ⅲ	仏の方からの救済(第三部『実悟旧記』一)	108

(1)	〈帰命〱たのむ〉の展開	108
(2)	仏になる	113
(3)	機法一体	116
(4)	仏の方より——回向・仏智	117
(5)	宿善無宿善論	123
(6)	回向贈与論	130
本論Ⅳ 無我と仏物(第三部『実悟旧記』二)		
(1)	本尊聖教論——コトバとモノと所有	132
(2)	無我論——独覚心批判	136
(3)	仏物・御用	141
(4)	仏法領	144
本論Ⅴ 聖なる言葉を語る権者(第三部『実悟旧記』三)		
		151

(1)	御文論——贈与された仏の真実の言葉の所有と非所有	151
(2)	権者制作としての御文	155
(3)	御文拝読報謝論——一方的投棄として	159
(4)	御文を読む蓮如上人	161
(5)	信心を勧める権者	164
(6)	仏法再興への若年の苦勞	167
(7)	夢告し破門する善知識	169
(8)	功成り名とげ	176
(9)	権者の言葉——述而不作	179
本論Ⅵ 仏法世間関係論(第三部『実悟旧記』四)		
(1)	「真宗論語」	183
(2)	王法と世間機	184

(3)	仏法世間主客論……………	187
-----	--------------	-----

(4)	誹謗と仏法者……………	191
-----	-------------	-----

(5)	世間道德への仏法優位論……………	195
-----	------------------	-----

本論Ⅶ 信心・聴聞・寄合・談合・報謝——一人性・関係性と贈与

(第三部『実悟旧記』五)	……………	199
--------------	-------	-----

(1)	一人性・関係性——自信教人信……………	199
-----	---------------------	-----

(2)	聴聞……………	204
-----	---------	-----

(3)	寄合・談合……………	206
-----	------------	-----

(4)	報謝……………	211
-----	---------	-----

終章	近現代における展開……………	217
----	----------------	-----

(1)	清沢師研究と『御一代記聞書』——寺川俊昭師・児玉暁洋師……………	217
-----	----------------------------------	-----

(2)	清沢師における『御一代記聞書』の発見——安藤州一師……………	223
-----	--------------------------------	-----

(3)	回向論における清沢師と蓮如上人……………	226
-----	----------------------	-----

(4)	暁烏敏師・三井甲之と回向論……………	231
-----	--------------------	-----

(5)	現代清沢師論と『御一代記聞書』——今村仁司……………	239
-----	----------------------------	-----

凡 例

- 一、『蓮如上人御一代記聞書』は、東本願寺出版刊『真宗聖典』を使用した。振り仮名、校注番号、出典名は省略した。必要に応じて東本願寺蔵版（片仮名本）を使用した箇所がある。
- 一、『五帖御文』は、『真宗聖典』を用い、帖数・通を一一の如くに表記した。
- 一、『歎異抄』など、『真宗聖典』所収の聖教は、これに依った。
- 一、『蓮如上人御一期記』『蓮如上人仰条々』『蓮如上人遺徳記』は、初出以降は『御一期記』『仰条々』『遺徳記』と略称した。
- 一、『真宗法要』本『御一代記聞書』は、『真宗聖教全書三列祖部』（大八木興文堂平成九年再版）所収本を用い、必要に応じて西本願寺蔵版を使用した。
- 一、多出する書名は、初出以降は略称で示した。
 - 『行実』＝稲葉昌丸編『蓮如上人行実』（法藏館、昭和四十七年第三刷）
 - 『集成』＝『真宗史料集成第二卷』（同朋舎、昭和五十二年）
 - 『講義』＝香月院深励講『蓮如上人御一代記聞書講義』（『真宗大系』第二十九・三十巻、国書刊行会、昭和五十二年再版）
 - 『真聖全』＝『真宗聖教全書』（大八木興文堂、一一平成六年、二一平成十年、三一平成九年）
 - 『全集』＝『清沢満之全集』（岩波書店、二〇〇二～二〇〇三年）
- 一、引用文の句読点は、出典に従ったが、右の内、『講義』では必ずしも厳密ではないので、私見で変更した箇所がある。

総説 『蓮如上人御一代記聞書』とは

（１） いかにか読むか

『蓮如上人御一代記聞書』を前にして、安居という場で講ずることが聖教拝読という行為であるとすれば、いかに読むべきかを思い惑う。『蓮如上人御一代記聞書』（以下『御一代記聞書』と略称）を拝読するという行為もまた解釈だから、聖教の教えを、教えのままに戴く、それが成り立たないことを知っているからである。

『御一代記聞書』拝読とは、この聖教に説かれた教えを、私という関係において解釈することである。思想史家の子安宣邦は、このような読みを「内部から読みうる眼の所有者と自負する読者がテクストとむすぶ「特権的な関係」と喝破した（『宣長問題』とは何か 青土社一九九五）。『御一代記聞書』拝読とは、この聖教を私との「特権的な関係」に引きずり込むことである。そこでは、私以外の他者の拝読は全く無関係である。聖教拝読は「一人一人のしのぎ」（『御一代記聞書』第一七二条）であって、

他者は眼に入ってこない。真宗学では先行学説を検討し批判してという展開がなされないのは、拝読だからである。

蓮如上人五百回御遠忌記念出版『蓮如・人と教え―『蓮如上人御一代記聞書』に学ぶ―』（大谷大学真宗総合研究所編、東本願寺出版二〇〇〇）における寺川俊昭師の序説が、拝読という在り方とそれが解釈であることをよく示している。『聞書』の中から、上人の言行を伝える珠玉のようなことばを選び出し、（中略）現代の私たちが改めて教えられるもの、心して学び知るべきものを聞き取った、その了解をまとめた」（二頁）とある。選り出し、聞き取り、了解し、それをまとめるのであるから、私との関係における解釈である。「願いはただ一つ、蓮如上人のあの歴史的な真宗再建の志願を、その具体的な言行をとおして改めて学び取り、私たち自身の保持して捨ててはならない情熱として、はっきりと自覚したいからです。（中略）真宗は教義ではなく、人生道となり人間像と現実化して、人を念仏する自覚道に立たせるものです。『蓮如上人御一代記聞書』は、上人の言行を伝える三一六の言々句々をもって、一貫してこのことを印象深くかつ感銘深く、現代の私たちに語り続けています」（二・三頁）といわれる。この聖教は、私たち自身の真宗再興の情熱となり、意味ある生き方の指針となり、念仏の自覚道に立たしめる書であると、明確に読み方が示されている。この指針に従っての拝読は解釈である。私はいかに聖教の内部を解き明かしたかという、私と聖教が「特権的關係」を結ぶことである。

とである。

『御一代記聞書』に関してではないが、御文の読み方として池田勇諦師の発言がある（『信心の再興―蓮如「御文の本義」―樹心社二〇〇二）。御文は、教団が造成した屈折がある蓮如上人像と一体になって読まれてきたが、それを払拭したのが近代教学であり、「近代という課題をもって根本的に問い返された」（二八頁）とされた。近代という課題による読みが、従来の読みを根本的に覆したというのであるから、聖教としてひたすら戴くという読み、課題をもってする読みが対置されたのである。御文であれ、『御一代記聞書』であれ、課題による読みが求められて、拝読という読み方を越えて解釈というレベルに至っている。拝読よりは読解といわねばならない。

池田師の場合、「近代という課題」からの読みがいわれた。「宗祖に帰る」姿勢、「本願に帰し、本願に生きる」（二二頁）こと、そこから読まれねばならないというのである。そこから御文に向かえば、『御文』がどんな書であるのか、いかなる性格のお聖教なのか」という問いが生まれ、「真宗再興の精神と行動」（二九頁）を示した書と捉え返される。御文に〈近代―宗祖へ帰れ―真宗再興〉を読み出すのである。これは讃仰でも拝読でもなく、読解であろう。宗祖回帰・真宗再興を読み出す主観的・主体的な読みとしての解釈であるが、同時に聖教を聖なる言葉としてそのままに受け止める拝読であるという根源的矛盾を内包している。真宗教学の営為の一環としての安居であるなら、この制

約から抜け出することは出来ない。

金子大榮師はこの問題を「教法の尊重と研究の自由とが矛盾する」かどうかとして論じている（『金子大榮著作集』第七卷春秋社一九八一、「信巻」第六章「真宗学の概念」）。「純粹なる真宗学に於て、教法を尊重するといふこと」は、「教法全体を貫通する、その本質的精神を領受し、それに依りて教法の各部分を理解すること」であり、この「教法の本質的精神」が学の必然的規範となり、それに順う事が「学問の自由」である、この場合の「自由」は研究する「立場の自由」ではなく、「教法を尊重するといふ内面に与へらるゝ自由」である（二〇〇―二〇二頁、傍点金子）。この意味で純粹な真宗学に尊重と自由の矛盾はない。

なお論は続くが、今はさておき、教法の尊重という枠組みの内にながら、同時に外部世界に開かれることが必要ではないのかと思う。宗祖回帰・真宗再興は、真宗世界での内部完結ではなく、普遍世界の内で果たされねばならないからである。金子大榮師はまた『真宗学序説』（文栄堂一九六六）では、「親鸞聖人の著述を研究するのは真宗学でなくして、親鸞聖人の学び方を学ぶのが真宗学である」、「こういうことになれば、自分は真宗学というものが、始めて公開せられると思う」（三〇―三二頁）と、公開を問題にしている。しかし「真宗学というものを十方衆生の前に公開する」（三二頁）とあるのは、外部世界への公開という意味を持つていようが、内部世界に留まっている感がある。

廣瀬泉師『序説浄土真宗の教学』（文栄堂一九九二）では、金子師を受けて「宗派の教義学にとどまらない真宗学が公開の学問となる。ですから、（中略）真宗学という学問が人間という存在にとって、公開の学問になるか、それともある特定の人々の知的好奇心を満たし、さらには宗派という教団の保身の弁明をする根拠となるような学びになっていくのか、どちらなのかという決定をはっきりしていくということです」（五〇頁）といわれる。こうした了解の前提に、「親鸞が浄土真宗として仰ぎ、浄土真宗として開顕した仏教を明らかにしていく」のが「聖典」（三四頁）であり、「人間が最も人間らしく生きることにおいて初めて載けるものを「聖典」という」（三六頁）という「聖典」論がある。「聖典」は、宗派教学のテキストではなく、人間存在そのものにせまる学として公開される。聖典が拝読されるとき、親鸞の浄土真宗という人間存在を明かにする学としての読みが求められる。このような読みとありのままの拝読、宗教という人間学と宗派教学、この二つの矛盾的緊張関係の中で、『御一代記聞書』は読まれねばならない。

そのように読むにしても、聖典拝読はテキスト読解になる。蓮如上人の音声言語が聴き取られ、文字言語化され、収集編集されるという三重構造で『御一代記聞書』というテキストが生まれた。『御一代記聞書』をテキストとして読めば、そこに了解されるのは、発話者蓮如上人でも、編者実悟でもない、あくまで『御一代記聞書』というテキストの思想なり信心なり、教学なのである。その意味で、